

非対面・非接触で行う市民参加の展示制作イベント「あなたの発見おしえてください」

千葉県立中央博物館 学芸員 林 浩 二

1. はじめに

Covid-19 の感染拡大防止のための基本的な対策として、いわゆる三密（密閉・密集・密接）および接触の回避が2020年2、3月から行われるようになった。博物館では展示室での日常的な配慮に加えて、行事を実施するのであれば、密や接触を避けた形での実施が求められる。

ここでは、千葉県立中央博物館 生態園で実施している市民参加の展示制作イベント「あなたの発見おしえてください」について、従来のやり方をわずかに改変することで接触を避けながら、博物館の展示事業への市民参加が実現できていることを紹介する。

千葉県立中央博物館には隣接して生態園があり、房総半島の代表的な植生を再現展示している（図1）。6.6ヘクタールあり、博物館と同じく1989年2月に一般公開された。休園日を除き開園時間内には自由に入出入りできて入園は無料であり、身近な自然観察のフィールド、また日常の散歩コースとして年間約54,000人の利用者を迎えている。（注1）

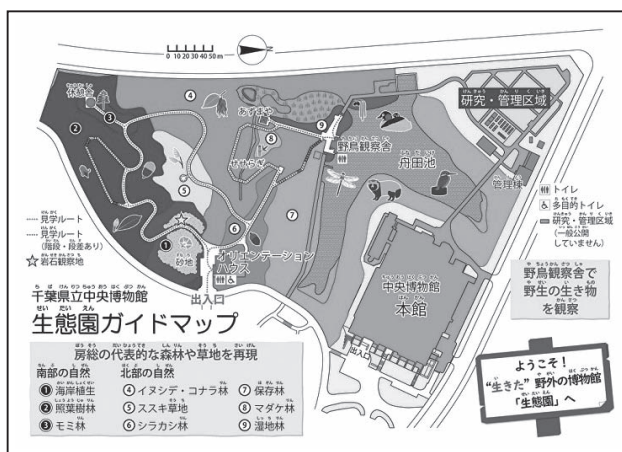


図1 千葉県立中央博物館 生態園ガイドマップ (2020)

2. 「生態園ギャラリー」と「あなたの発見おしえてください」

1) 生態園ギャラリーのあゆみ

生態園は身近な自然観察のフィールドであり、ただ園路を歩くだけでなく、いろいろな生き物を見つけたり、気づいたり、体験してもらうことがそもそも施設のねらいである。それらの

活動を促すことに加えて、生態園を展示スペースである「ギャラリー」に見立て、来園者によって生態園のモノ・コトで制作された作品を並べて、他の来園者に見ていただく活動を生態園ギャラリーと呼んできた。当初は団体向け、特に高齢者団体プログラムとして、写真だけでなく自然物のコラージュや落ち葉のフロッタージュなどを組み合わせた作品を作ってもらったこともある（注2）。2005年からは、もっぱらデジタルカメラによる写真と俳句／川柳にならって五・七・五の十七音など短文による解説文の作品を、期間を決めて募集し、こちらでA4判の用紙にレイアウト・印字して作品（図2）として展示してきた。来園者が応募する作品のコンテストとして募集し、来園者による投票で「優秀作」を選ぶことも行ってきた。



図2 写真と五・七・五の短文説明のレイアウト例
説明文は大きなフォントで縦書き
(スタッフによる参考出品)

生態園の入口には展示と情報提供のための施設としてトイレも備えたオリエンテーションハウスがある。生態園ギャラリーの作品の期間を定めた展示もその室内での展覧会として始まった。せっかく入園したのにオリエンテーションハウスに立ち寄らない方々には見ていただけないのはもったいないので、入口に近いオリエンテーションハウス前に当時あった木製デッキで屋外展示することを考えた。これでこそ生態園ギャラリーと言えるだろう。印刷したA4判用紙を野外で展示するためには、作品をラミネート加工して、プラカード様のものに貼り付けて設置する必要がある。木製デッキにずらりと作品が並ぶのは壮観だった（注3）。この屋外展示の経験が、その後の「あなたの発見おしえてください」につながった。

2) 来園者の応募作品で野外解説板を作る

「あなたの発見おしえてください」はコンテストではなく、写真と五・七・五の解説文で作った作品を園路沿いに野外解説板として設置する活動である。

生態園のような野外観察施設や自然公園では、恒久的な（数年以上の長期にわたって設置さ

れる) 解説板を設置するのが一般的で、木製・プラスチック製・金属製などの丈夫な設備・装置を必要とする。一方、一時的な野外展示のためなら薄手の用紙をラミネート加工すれば足りる。ラミネート機の普及については確認しきれていないが、ここ 20 年ほどでラミネート機が一気に普及して、ラミネート加工が簡便・安価にできるようになったことは、このような一時的な野外展示の制作を促進したといえるだろう。

生態園でも、植物の開花時期などに合わせて、学芸員が設置する解説パネルを作成・設置している。A 4 判用紙に写真と和名・科名・学名と 150 字程度とそれなりの長さの説明文を配置して、ラミネートしてからプラスチック製のプラカードに貼り付けて設置する(図 3)。一方、「あなたの発見おしえてください」は同じく一時的な野外展示の解説板の作成・設置だが、来園者(利用者)による応募/参加によって作品が作られるところが特徴である。

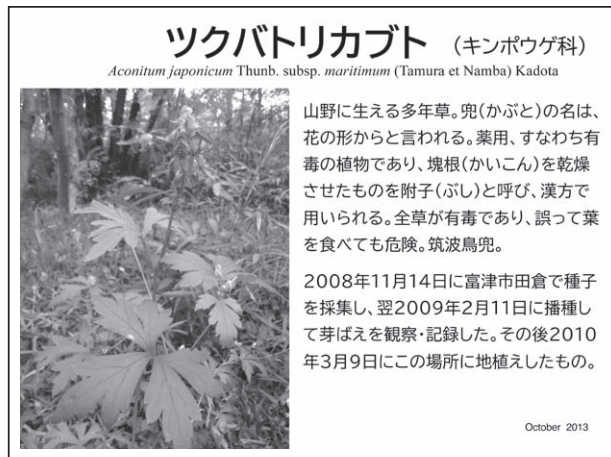


図 3 職員が制作する野外解説板の例
用紙は横置き、説明文は横書きが基本。

3) 発見した現場に設置する

「あなたの発見おしえてください」のもう一つの特徴は、発見したその現場付近の園路に作品を設置することであり、半ば常設的な野外解説板として各所に分散して園路に設置している。解説板への風当たりなどによるが、数年間持つものもある。

時には一つの素材に「あなたの発見おしえてください」の複数の作品が集まることもあり、一方で、図 2 のような「あなたの発見おしえてください」による来園者制作の野外解説板と、図 3 のような学芸員制作の野外解説板が同じ素材に対して作られ、並んで設置されることもある。

4) 一般市民による短くて平易な解説文

「あなたの発見おしえてください」の解説文については、できるだけ五・七・五の十七音で作っていただくようお願いしている。字余り・字足らずのこともしばしばあるし、時には七・七を加えた短歌形式のものもある。それでも、学芸員作の 100 字～200 字の解説に比べればはるかに短く、見る側からすると読もうという気になる可能性が期待できる。そもそも、専門家ではない一般市民が作る短い解説文なので難しい用語は少なく、自分なりの発見・視点の面白さが表現されていることが多い。

作品の仕上げや作り方も少しずつ変えてきた。ある年からは、園路に置かれる「野外解説板」としての意味・意義を増やすため、写真から分かる範囲で生物の種名・科名をスタッフ側で書き加えるようになった。加えて、短い解説文の漢字とカタカナにはすべて振り仮名（ルビ）を付けることにした。このようにすると、学齢前の子どもたちも読んでくれるということも分かった。

5) コミュニケーション・ツールとしての作品

学芸員による解説文は、どんなテーマであっても客観的な事実・知見に基づき記述されることが一般的であろう。一方、「生態園ギャラリー」や「あなたの発見おしえてください」の作品は、参加者（応募者）の主観による切り取りであり、表現である。だからこそ、作品を前にして感想・意見が沸くし、連れがいれば話がはずむ。行事のタイトル「あなたの発見おしえてください」もこの趣旨から付けている。

「あなたの発見おしえてください」の解説板を見る／読む時、その来園者は作品を応募した作者である来園者と、作品を通じて「対話」できる可能性があると考ええる。押しつけがましくない五・七・五調の説明文がそれを可能にしている。それは、学芸員による客観的な解説文との大きな違いであろう。生態園ギャラリーの初回開催時から、個別の作品に対して鑑賞者によるコメントを残すことを付箋紙で行うなど工夫してきた。

こうして述べてきた、「あなたの発見おしえてください」の現場性、非専門家性、交流性とも言えるような特性は、伝統的な博物館活動のオルタナティブとして提案されたエコミュージアムと通じる部分が大きい。このことについては稿を改めて議論したい。

3. 三密・接触を避ける工夫

1) 従来の方法

生態園ギャラリー／あなたの発見おしえてくださいはいずれも当初から、参加者を一同に集めての活動は全く考えていなかった。作品募集期間中に3日の撮影会の日を設定するが、撮影会といっても、受付時間内の来園者に声かけ、チラシ配りなどをして、園路で見つけたものを撮影するように促すだけで、集合する必要はなかった。定員は特に定めず、小学生以下の子どもについては保護者の付き添いを求めた。家族で参加して、協力して作品を作ることもしばしばある。

行きに声をかけた来園者には、園路から戻ってきたところで改めて声をかけて、応募に応じられるようであればオリエンテーションハウス前ないし室内のデスクに着席してもらって、撮影してきた写真から1ないし数点を選んでもらった。デジタルカメラ全盛期には、カメラ本体からメモ리카ードを抜き出してカードリーダーで読み取り、パソコンのモニタの大きな画面と一緒に写真を選ぶこともあった。写真が選べたら、それにふさわしい五・七・五音の説明文を手書きしてもらうための記入用紙と鉛筆を渡して、考えてもらった。記入用紙には、説明文、

場所を示すための杭番号（注4）、ペンネーム、連絡先の電話または電子メールアドレスなどの記入してもらっていた。その場で説明文が思いつかない場合には帰宅してから電子メールで送信してもらうケースも時々あった。

2) 接触を避ける工夫

生態園ギャラリー／あなたの発見おしえてくださいでは、参加者と博物館職員の接点で課題になるのは、冒頭の勧誘、戻って来てから写真を選び・解説文を考えてもらう時間、作品を提出してもらうことまでの3つの場面である。

冒頭の勧誘について；声をかけたり勧誘するのは屋外に限ることとした。強制ではないが来園者はほぼ全員、マスクを着用してくれているので、双方ともマスク着用の上で短時間の説明に限るようにしている。幼児などマスクを付けていない方がいる場合にはフェイスシールドの着用が必要である。行事の説明チラシ・園内地図などの受け渡しの際は手渡しを避け、参加者自らがパンフレット立てなどから持って行くことが望ましく、その前後で手指消毒してもらえばなおよい。

写真選びと解説文の考案と作品の提出については対面で行うことを断念し、従来も一部で対応していたように、後日、撮影日を含めて必要な情報を電子メールで送信してもらうことにした。なお電子メールでのやりとりはペンネームでも用が足り、本名や電話番号など受け取る必要のない情報は極力、避けることとした。

以上のように従来のやり方から手順・方法を少しだけ改変することで、生態園ギャラリー／あなたの発見おしえてくださいでは、接触を減らしての実施が可能となった。従来から、集団を率いたり、少人数であっても連れて歩いて解説者が説明するのではなく、参加者が自分たちのペースで園路を歩いて自らが発見・記録し、そのモノ・コトを共有してもらうという「参加型」のやり方であったことが、接触を減らすことを容易にできた理由の一つと考えている。

次年度に実施予定の生態園ギャラリーでは、オリエンテーションハウス室内で応募作品を展示、作品に対して来園者による投票を実施する計画である。従来は、ドングリやプラスチックのチェーンリングで、あるいは投票用紙を使うことで投票を行ってきたが、接触を避けるためにはオンラインなど別の方法が必要となりそうで、現在検討しているところである。

4. 市民の「参加」を考える

まとめに代えて、最後に「市民の参加」について考えたい。

生態園ギャラリーやあなたの発見おしえてくださいでは、参加者の主体的な活動が作品につながり、できた展示は、学芸員が作る解説板と共に、他の来園者にとって意味のある展示になっており、博物館の展示事業への市民参加ができていると見ることもできよう。多くの博物館で教育系ボランティア・資料系ボランティアの事例は一般的だが、一般市民が特に事前の準備なしでも参加できるイベントで展示活動に貢献できるのはユニークで、接触や密を避けながらも

これが実施できていることに大きな意義があると思う。

ここでできていることは市民参加のいわば「入口」にすぎない。博物館における市民参加はそれ自体を目的としてはならず、広く地域社会で市民や NGO / NPO が活躍して課題・問題の解決に取り組むための入口という認識を持つべきとわたしは考えている。

市民や子どもの社会への参加・参画ということではしばしば「参加のハシゴ」が話題になる。日本ではロジャー・ハートの『子どもの参画』（2000）で広く知られるが、ハシゴのモデルはアメリカ合衆国の公衆衛生学者 Sherry Arnstein が 1969 年に発表したものが初出である（注 5）。Covid-19 のパンデミックで世界が混乱しているこのときだからこそ、公衆衛生の向上には市民へのエンパワメントが重要であるという趣旨を説いた Arnstein に思いを馳せるのは意義深いと考える。

注 1. ウェブサイトで公開されている千葉県立中央博物館 年報 31 号（平成 30 年度）p.132、期間は 2018 年 4 月～2019 年 3 月で、Covid-19 の影響がない直近の年度。臨時休館・休園の日程や入館時の対応などについては年報に記録されている。

注 2. 生態園ギャラリーの展開については林（2009）を参照のこと。リクエストがあれば PDF ファイルを送付できる。問い合わせ先：hayasi @ chiba-muse.or.jp

注 3. 2006 年・2007 年の生態園ギャラリーではオリエンテーションハウス前の屋外に展示した。

平成 26 年度 生態園トピックス展 生態園ギャラリー ページからリンクしている。

<http://www2.chiba-muse.or.jp/www/NATURAL/contents/1521298530775/index.html>

注 4. 林内・草原などへの立ち入りを防ぐため、生態園では園路の両側の境界を杭とロープで区切ってある。片側の杭には、アルファベット 1 文字とアラビア数字の連番からなる杭番号が付けてあって、職員間・業務委託業者の係員間で園路の場所情報が共有できるようになっている。そこで、このイベントへの参加の可能性がある入園者には、園路に出発する前の説明で、作品になりそうなものを撮影したら、周囲を見渡してその杭の番号を次のコマとして撮るように説明する。こうすることで、できあがった作品について、その発見・撮影の現場に野外解説板として設置できる。

注 5. Sherry R. Arnstein. 1969. A Ladder of Citizen Participation. Journal of the American Institute of Planners. 35(4): 216-224. ウェブサイトで 2007 年から公開されている。
<http://lithgow-schmidt.dk/sherry-arnstein/ladder-of-citizen-participation.html>

Roger Hart の原著は 1997 年刊、訳本は；ロジャー・ハート [著] 木下勇・田中治彦・南博文 [監修] IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）日本支部 [訳]. 2000. 子どもの参画 ―コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際. 萌文社, 東京.

文献：林 浩二. 2009. 生態園ギャラリーことはじめ. 千葉県立中央博物館・千葉県立中央博物館友の会（編）. 博物館は知のワンダーランドーはたちを迎えた中央博と友の会の活動ー. 19-21. 千葉県立中央博物館友の会, 千葉市.